関連国際学会の報告

第4回ヨーロッパ口腔内科学会

藤 林 孝 司

—Forth Meeting of the European Association of Oral Medicine—

Takashi FUJIBAYASHI

本誌第2巻第2号において第3回ヨーロッパ口腔内科学会の報告をしているが、今回それから2年後に第4回の学会, 4th meeting of the European Association of Oral Medicine (EAOM) が開催され、参加したのでその報告をしたい。

4th EAOMは1998年10月1日から3日まで3日間、オランダのアムステルダム市内でRoyal Netherlands Academy of Arts and Sciencesのビルを会場として行われた。会長はオランダ、アムステルダムにあるVrije University 大学病院、口腔外科および口腔病理科 (Department of Oral & Maxillofacial Surgery and Oral Pathology) のProf. Isaac van der Waalであり、参加者は約150名であった。本会は1991年スペインで第1回が行われて以来、2-3年に一回行われており、前回は1996年8月北アイルランドのBelfastで第3回が行われ、前回の会議においてヨーロッパ諸国のヨーロッパ共同体への移行と共に、各国のOral Medicineの共通の問題を話し合う場として会の組織が出来上がったものである。Executive CommitteeとしてはPresidentにSir D. Mason (イギリス), Vice PresidentにI. van der Waal (オランダ), Secretary GeneralにC. Scully (イギリス), TreasureにS. Challacombe (イギリス), そのほかExecutive MemberとしてT. Axell (ノルウェー), M. Lucas Tomas (スペイン), A. Mano Azul (ポルトガル) の合計7名からなっている。参加国は約20カ国でノルウェー、フィンランド、スウェーデン、デンマーク、エストニア、アイスランド、アイルランド、北アイルランド、イギリス、オランダ、ベルギー、フランス、ドイツ、スイス、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、スロベニア、ユーゴスラビア、クロアチア、イスラエル、ギリシャ、イタリ

ア、スペイン、ポルトガルなどで、そのほかに今回の会議にはこれらヨーロッパ諸国以外ではアメリカ、カナダ、ニュージーランド、ブラジルなどからも参加者がみられた。日本からは前回も今回も筆者一人であった。

会場は一つのホールに全員が集まっての講演で、一部ではポスター発表も行われた。プログラムは10月1日 (木) 第1日目の午後から始まり、会の発起者第1回の会長であったスペインM. Lucas Tomasが開会の挨拶を行ったのち、M. Malmstrom (フィンランド) がConnective tissue disease and masticatory system involvementと題する総説的な講演を30分行った。内容はSLE, RA, PSS, SS, MCTDなど膠原病の口腔および顎顔面の病変に関するもので、日本ではあまり口腔領域でこの種の話を経験的に聞く機会は少ないので、この分野に興味がある筆者には有用ではあったが、やや研究面での成績には乏しく主として臨床的な側面からの話であった。ついで14:45-15:30一般講演に移り、口腔扁平上皮癌における口腔白板症併発例102症例の解析 (ドイツ) や、同様の100例の分析 (オランダ) など4題があり、コーヒープレイクののち、16:00-17:00再び一般講演があり、口腔粘膜の20年間にわたる経年的観察 (スウェーデン)、一般内科家庭医 (primary care physicians) における口腔乾燥症に対する認識と経験 (イギリス) などの発表があり、このセッションの最後に筆者はシェーグレン症候群における日本の診断基準とヨーロッパ診断基準の精度の比較検討と題して、823例の検討結果に関する報告を行った。ECのヨーロッパ基準では1次性SSと2次性SSで基準を区別していることから、日本のデータでは1次性と2次性では精度に違いはないのかとか、唾液腺造影撮影についてEC基準では検査項目にはすでに入っていないことから、日本ではどうしているのかとか、この種の診断基準に関する精度の検定をする場合そもそも何をもちて陽性、陰性とするかのgolden standardが問題であるが、その点は日本ではどうしたのかとか、極

獨協医科大学口腔外科学講座 (主任: 藤林孝司教授)
Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Dokkyo University School of Medicine (Chief: Prof. T. FUJIBAYASHI)

めて専門性の高い質問があり、実のある討論を行うことが出来た。最後に17:00-17:30の30分はJ.B. Bagan (スペイン)のLichen planus; an overviewと題する研究面、臨床面の両面にわたる最近の研究展望があり、17:30-18:30はロビーにてワイン、ビール、軽食によるinformal receptionがあつて、色々な人に会ってお互いの研究内容やOral Medicineに関する興味や情報交換を行い、打ち解けた雰囲気の中で第1日目を終了した。

10月2日(金)第2日目は8:30-9:15 F. Lozada-Nur (アメリカ)によるThe use of glucocorticoids for the management of oral mucosal vesiculo-erosive diseasesと題する基調講演があつたが、米国ではOral Medicineの専門医が非常に頻繁にかつ積極的にステロイドの内服療法を行っているのが印象的であつた。その後、午前中に14題の一般講演があり、天疱瘡、類天疱瘡、HIV、再発性アフタ、扁平苔癬、カンジダなどに関するものであつたが、筆者は個人的には粘膜類天疱瘡の標的抗原(イギリス)、再発性アフタにおける連鎖球菌の分子生物学的研究(イギリス)、尿毒症性口内炎の症例報告(フランス)、再発性アフタとベーチェット病における活性化 $\gamma\delta$ T細胞の研究(イギリス)などは興味ある発表であつた。

午後は13:15-14:00ポスター発表と討論があり、14:00-14:45は一般講演4題で、中にはjuvenile paracoccidioidomycosisの口腔病変(ブラジル)という稀症例の報告もあつた。14:45-15:15はA. Piattelli (イタリア)のApoptosis in oral mucosal diseasesの基調講演があり、種々の口腔粘膜疾患におけるアポトーシスが論じられた。その後コーヒーブレイクののち、15:45-16:30年次総会として総会議事があり、初日の午前中に行われたCouncil Meetingの結果報告や、のちに述べるInternational Federation of Oral Medicineの動きや準備会の報告、2001年に北アメリカでAmerican Association of Oral Medicineと合同で会を開くことなど、さらに第5回EAOMは2年後(2000年)にスウェーデンのイエテボリで開くことなどが紹介された。2日目の夕方は18:00よりGrand Hotel Krasnapolskyにおいてdrinks and dinnerの夕食会が行われた。

10月3日(土)第3日目は8:30-9:00に7月にシカゴで行われた第3回World Workshop on Oral Medicineの報告が会長のH.D. Millard (アメリカ)からなされ、ヨーロッパからも多数の参加があつたとのことであつた。9:00-10:00にはOral Medicine in Europeと題するシンポジウムが行われ、Oral Medicineの立場や専門性、歯科一般との関係、今後のEC内での問題などが論じられた。たとえばT. Axell (ノルウェー)はOral Medicineは明

らかな専門職であるべきか? P.A. Reichart (ドイツ)はOral Medicineと他の歯科の専門分野との関係、P-J. Lamey (北アイルランド)はOral Medicineと他の医科専門分野との関係、D. Wray (イギリス)はOral Medicineにおける教育基準、C. Scullyは各ヨーロッパ諸国のOral Medicineの現状とまとめが発表された。Oral Medicineの専門性、独立性はヨーロッパの中でもまちまちであり、Oral Medicineが歯科の中でも専門性が強く、国内に専門学会があり、教育研修プログラムや認定医制度もあるスカンジナビア諸国やイギリスに対して、国内組織はあるが専門性はそれほど強くないイタリア、スペイン、ポルトガルなど、一方Oral Medicineの専門家が少ないドイツ、スイス、フランスなどがあり、EC内での国におけるOral Medicineの立場に諸問題があることがクローズアップされ、筆者には非常に興味あるシンポジウムであつた。

30分のコーヒーブレイクの後、10:30-12:30には最後のセッションとしてS. P. Porter (イギリス)が座長になりClinical Conference on Oral Medicineと題する症例検討会が行われた。5人の演者により5症例が提示され、各演者が症例の主訴、既往歴、現病歴、現症、臨床検査所見、病理所見など、さらに場合により治療経過を含めた型どおりの症例呈示をおこない、聴衆から自分が考える臨床診断名が出され、治療法についても討論するが、最後に座長が整理してコメントするといったような形式であつた。5症例はいずれも結構難しく、筆者が一見してすぐ分かるような症例は1例しかなかった。結果的には5症例はLangerhans cell histiocytosis, HIV感染者のhistoplasmosis, dyskeratosis congenita, plumonary malignant tumorからのmandibular metastasis, Nicorandil服用者における口腔の難治性潰瘍などであつた。とくに最後の症例のNicorandil服用者のアフタ性潰瘍は、本薬は日本で開発され使用され、その後ヨーロッパに輸入され使用されている狭心症治療薬であり、最近口腔内潰瘍の報告がでていうという。それでは日本からどうして今までそのような報告がないか議論されたが、日本でのNicorandilの使用頻度はかなり高いと思うが、筆者もそのために生じたアフタ性難治性潰瘍を診た経験はなく、経験がないという以外には何とも答えられなかった。どなたか経験があれば是非教えていただきたい。12:30より閉会式があり3日間にわたる学会を終了した。

本学会の次回はThe 5th Biennial Congress of The European Association of Oral Medicineとして会長Dr. Mats Jontellのもとで、2年後の2000年8月24-26日にSwedenのGoteborg市において行われる。

また学会初日の昼の時間に Oral Medicine 研究者の国際協力の話し合いの会が会長の I. van der Waal と C. Scully の呼びかけで行われた。会のおよそ1週間前に Fax と E-mail で連絡があったが日本からは筆者しかいなかったのとおりあえず参加した。結果的には EAOM からはイギリス2名, オランダ, ポルトガル, スペイン, ノルウェー各1名の合計6名, AAOM (American Association of Oral Medicine) からはアメリカ2名, カナダ1名の3名, 日本から1名が集まり, Oral Medicine についての診療,

研究, 教育などを発展させるための国際協力について話し合い, 各国の組織は独自性は保ちつつ, 時々会合をもって集まる federation のようなものを考えてはどうかということになり, 下記に示す議事録が合意された。ついで3年後の2001年に北アメリカのどこか(たぶんカナダのモントリオールかケベック)で International Federation of Oral Medicine の第1回総会をもつことにし, その目標で今後行動していくことになった。

INTERNATIONAL FEDERATION OF ORAL MEDICINE

Declaration of Interests

October 1st 1998, a meeting was called in Amsterdam, Netherlands, between representatives of the AAOM, Japanese Society for Oral Mucous Membranes and EAOM with the purpose of discussing a possible federation. Apologies were received from the Australasian Association for Oral Medicine.

The Organisers had the following general objectives: to

1. promote collaboration, education and research in oral medicine
2. promote continuing education in oral medicine in the dental profession
3. promote the interest of research in oral medicine at other institutions, professional associations and industries
4. inform governments and other official institutions of the significance of oral medicine for oral health and prevention of oral diseases
5. promote the exchange of scientific information through congresses, other meetings and workshops.

The preliminary organising committee consisted of:

AAOM

Dr A Reiner

Dr MR Demak

Dr M Tyler

JSOMM

Dr T Fujibayashi

EAOM

Dr Isaac van der Waal

Dr Antonio Azul

Dr Miguel Lucas-Tomas

Dr Tony Axell

Dr CScully

Dr SJ Challacombe

Conclusions

1. It was agreed that an International Federation of Oral Medicine be established with the goals of international communication and education.
2. It was agreed that the organising committee should attempt to meet next, preferably with representatives from Australian, Israeli and other regional societies of oral medicine, at the AAOM meeting April 2000 in Las Vegas.
3. It was agreed that an International Congress on Oral Medicine should be arranged for 2001 in north America, preferably Montreal or Quebec.
4. It was agreed that it was important to communicate with Dean Millard and David Mason in order to look towards a collaboration for possibly 2003 and a world workshop in collaboration with the earlier initiatives from those two representatives of the Universities of Michigan and Glasgow.
5. It was agreed that CS would suggest a logo for IFOM.
6. It was agreed to use the internet bulletin board organised by David Sirois and C Scully for communications where possible.

合意された議事録

[文責 : C. Scully]